

【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力（四）

榎ノ木大学士と蛋白石、ジャータカと地学

鈴木 健 司

本稿は「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマの下に企図された、連作論文の一つである。これまで（一）「基礎編・珪化木」（『及び瑪瑙』）「文学部紀要」文教大学文学部第21・2号、（二）「基礎編・珪化木」（『言語文化』第20号、文教大学言語文化研究所）、（三）「基礎編・まごい淵」と「豊沢川の石」（『注文の多い土佐料理店』第12号、高知大学宮沢賢治研究会）を発表している。本稿では、前半の四一で、「地学的想像力」を国内産蛋白石（オパール）との関連において追究する。特に童話「榎ノ木大学士の野宿」の成立に関し、明治末から大正初めにかけて「東京宝石株式会社」として良質のオパールを産出していたオパール鉱山（福島県宝坂）の存在に注目し、作品生成の契機となった可能性の立証を試みる。後半の四二では、「地学的想像力」を外国産蛋白石（オパール）との関連において追究する。童話「貝の火」における「貝の火」とは何か。さらには、童話「銀河鉄道の夜」における「鳥捕り」と「貝の火」の主人公ホモイとの連関性を、ジャータカとの視点から分析し、賢治文学において、地学的想像力と仏教思想とが深く関わりあっている事実を立証する。

キーワード：地学、貝の火、鳥捕り、ジャータカ、蛋白石

第一部、応用編・榎ノ木大学士と蛋白石

一 法螺吹き男としての 榎ノ木大学士

童話「榎ノ木大学士の野宿」（推定成立期…大正十二年頃）は、地学的見地から考えた場合不可解な問題を含んでいる。それは、宝石用の蛋白石（オパール）を採取するため、主人公の榎ノ木大学士が、岩手県に実在する「葛丸川」に出かけているという点である。

オパールといえば、歴史的にハンガリーオパール（産地はスロヴァキア）が有名だが、大正時代にはすでに、質の良いメキシコ産オパールやオーストラリア産オパールの輸入が盛んであった。国産オパールが宝石市場に出ていたとは考えられない状況のもと、物語を設定する上で、作者が宝石用オパールの産地を国内に求めたことは、かなり大きな疑問といえるだろう。

本稿は「檜ノ木大学士の野宿」の作品論を展開することを目的にはいないので、作品分析への深入りは避けるが、基本的な私の読みをここで提示しておく必要があると考える。この作品はあくまで、野宿第一夜、第二夜、第三夜の話が中心であり、檜ノ木大学士の蛋白石探しは、いわゆる額縁にすぎないというのが私の読みである。なぜなら、この作品は喜劇的な枠組みを必要としており、檜ノ木大学士が法螺吹きに設定されているのはそのための必然と考えられ、檜ノ木大学士の三夜の体験の内実こそが、物語の中心だと判断しているからである。

そのように考えた場合、宝石用の蛋白石の採取は、

作品の構成上、当初から成功する可能性が皆無であったと推測することができる。成功してしまつては喜劇にならないだろう。同じことが、「貝の火兄弟商会」の「赤鼻」の支配人についてもいえるように思う。檜ノ木大学士にオパール採取の依頼をした支配人と、詩「真空溶媒」（『春と修羅』第一集）に登場する得体の知れない紳士が、ともに「赤鼻」であったことは単なる偶然ではない。支配人の「赤鼻」は、一筋縄ではいかない人物であることを象徴しているのである。

真の主役は、第一〜三夜の夢に登場する、ラクシヤン四兄弟や花崗岩を構成する諸鉱物、中生代の恐竜である。檜ノ木大学士は俗物世界の代表格として狂言回しに徹しており、この点が了解されれば、檜ノ木大学士のモデルが作者自身であったと仮定しても差支えないはずだ。作者である賢治は自身の体験した三夜の出来事（思想的な内容も含む）を、檜ノ木大学士という分身のキャラクターの創作を通じて、読者に伝えようとしていたのである。

二 丸川と蛋白石

ある日、櫓ノ木大学士の家に「貝の火兄弟商会」の赤鼻の支配人がやって来る。

「先生、ごく上等の蛋白石^{たんぱくせき}の注文があるのですがどうでせう、お探しをねがへませんでせうか。もっともごくごく上等のやつをほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですから、ありふれたものぢやなかなか承知しないんです。」

「うん、探してやらう。蛋白石のいゝのなら、流紋玻璃を探せばいゝ。探してやらう。僕は實際、一ぺんさがしに出かけたら、きつともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして宝石のある山へ行くと、奇体に足が動かない。直覚だねえ。いや、それだから、却って困ることもあるよ。たとへば僕は一千九百十九年の七月に、アメリカのチャイ

アントアーム会社の依頼を受けて、紅宝玉^{ルビィ}を探しにビルマへ行つたがね、やつぱりいつか足は紅宝玉^{ルビィ}の山へ向く。それからちゃんと見附かつて帰らうとしてもなかなか足があげられない。つまり僕と宝石には、一種の不思議な引力が働いてゐる、深く埋まつた紅宝玉^{ルビィ}どもの、日光の中へ出たいといふその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだらうね。その時も實際困つたよ。山から下るのに、十一時間もかかったよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅宝玉^{ルビィ}坑さ。」

「グリーンランド」にどれほどの成金が出たのか。当時デンマーク領で、人口もわずが、捕鯨を主たる産業とするグリーンランドに成金のいた可能性はなさそうに思えるが、このような設定も、喜劇的な物語を設定するための手法のひとつと考えてよいと思う。おそらく「アメリカのチャイアントアーム会社の依頼を受けて、紅宝玉^{ルビィ}を探しにビルマへ行つた」というのも、法螺話にちがいない。しかし、法螺話は法螺話なりにリアルさが必要であることも事実で、紅宝玉^{ルビィ}の産地と

してビルマ（現・ミャンマー）をあげたことは正しい選択である。ビルマのモゴック鉱山のルビー（写真1）は当時から世界的に有名であった。檜ノ木大学士の発見したという「バララゲ」鉱山はむしろ賢治の造語だが、それらしい響きをしているところなどよくできた話である。

賢治とともに豊沢川周辺の地質調査をおこなった盛岡高等農林の林学科助教授・小泉多三郎の聞き書きが、堀尾青史著『年譜 宮澤賢治伝』（図書新聞双書、昭41・3）に記されている。特に左記引用部分は、賢治の檜ノ木大学士の資質を示している。

大沢温泉に第一夜をあかし、鉛を半分こえた時でした。宮澤は、私に特にきかせるということでもなく、何かひとりごとを言いながら道を歩いているのです。考え考え、頭の中にあるものをまとめているといった調子で、「この谷のこつち側には金、こつち側には銀、ここには鉄があります」「などと言っているのです。学問的なカンをひらめかしながら、その辺の地質を見透

すようにやっているのです。

賢治の神通力が、どこまで科学的裏づけをもっているものなのか判断のしようもないが、どこか神秘的な直感というものも混じっているように感じられる。檜ノ木大学士が法螺吹きなのは、神秘家の裏返しでもあるからだろう。

次の日諸君のうちの誰かは
きつと上野の停車場で、
途方もない長い外套を着、
変な灰色の袋のやうな背囊をしょひ、
七キログラムもありさうな、
素敵な大きななづちを、
持った紳士を見たらう。
それは檜ノ木大学士だ。
宝石を探しに出掛けたのだ。

中略

四月二十日の午后四時頃、
例の檜ノ木大学士が

「ふん、此の川筋があやしいぞ。たしかにこの川筋があやしいぞ」

とひとりぶつぶつ言ひながら、からだを深く折り曲げて

眼一杯にみひらいて、

足もとの砂利をねめまはしながら、

兎のやうにひよいひよいと、

葛丸川の西岸の

大きな河原をのぼって行った。

葛丸川は、奥羽山脈方面に水源をもち、石鳥谷町（現在・花巻市）で北上川に注ぐ、実在の川である。実在の地を作品中に取り込むことは賢治作品の場合珍しいことではなく、それだけに、単に川の名を借りただけと断じてしまうことはできないだろう。葛丸川は賢治が地質調査をした地域でもあり、葛丸川周辺の地理や地質を熟知していたと推定できる。「大正七年五月より」の短歌に「葛丸」の題を持つ【歌稿 668】「ほしぞらは／しづにめぐるを／わがこゝろ／あやしきものにかこまれて立つ」が確認でき、「わがこゝろ／

あやしもきのかこまれて立つ」という表現に、野宿第一夜との関連性が明らかである。ただ、このような感覚は他の短歌にも見出すことができる。たとえば、「大正四年四月より」の【歌稿 237】「落ちつかぬ／たそがれのそら／やまやまは生きたることく／河原を囲む」や【歌稿 240】「毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかに来る」なども同趣であり、山を迫り来る生き物のように捉える感覚は、葛丸川での特殊な体験というよりは、賢治生来の資質が元であり、それぞれの場所で経験したことを短歌にしたと解釈すべきことを示している。

「檜ノ木大学士の野宿」の第一夜、第二夜、第三が、必ずしも葛丸川流域での野宿と読めないのも、物語におけるプロットの入れ替えということが生じているからであろう。つまり野宿が葛丸川での体験と直結していない可能性を考慮しておかなければならない。

蛋白石の存在はどうだろう。葛丸川から採取可能だろうか。もし採取できるなら、葛丸川という実在の川の名を出すことの意味も理解しやすいこととなる。たとえ、「火の燃える」ような蛋白石でなく、「たゞの白

い石」のような蛋白石が採取できるだけでも、舞台を葛丸川とした理由は納得できるのである。

蛋白石の発見を目的に、少なくとも数人の賢治研究者、地質学者が、葛丸川に向い調査をおこなったと思われる。その先駆者の一人で、地質学を専門家とする宮城一男は、その著書『農民の地学者 宮沢賢治』（築地書館、昭50・1）で、次のように述べている。

葛丸川というのは實在の川。花巻市の約二キロほど北で、北上川にそそいでいる川です。そして、その川の上流には、約一・八キロ四方にわたって、新第三紀の石英安山岩が分布しているのです。このことは重要です。というのは、蛋白石は、石英安山岩のわれ目などによく産するからです。樺ノ木大学士は、もとよりそのことを知っていてこの川をえらんだのでしょう。

宮城はなぜ、蛋白石を「よく産する」石を石英安山岩と特定したのか、一般的にいえば、蛋白石を「よく産する」石は流紋岩であろう。また、岩の割れ目に産

するならば、安山岩であっても十分に可能性があるだろう。寡聞にしてこれまで葛丸川の石英安山岩から蛋白石が採取されたとの調査報告を知らず、私自身も発見していない。葛丸川の上流（葛丸ダム手前からダムの先）で見かけるのは、ほとんどが流紋岩（写真2）である。白色をしており、風化部分は粉状になっている。石英安山岩地帯になるのはそのさらに奥であり、葛丸川を遡った場合出会う崖面の岩石は、単純化して言えば、凝灰岩 安山岩 流紋岩 石英安山岩の順となる。宮城の記述から判断するに、宮城は蛋白石を採取していないと判断される。

地元の地質学者照井一明（『解題』細田嘉吉著、鈴木健司・照井一明編『石で読み解く宮沢賢治』平20・5）や茂庭隆彦（『中・高等学校における理科の野外観察の指導力向上に関する研究』、岩手県総合教育センター科学産業教育室、平19・1）によれば、葛丸川に蛋白石は存在するという。ダム手前約一キロメートルほどのところに三ツ鞍山という安山岩でできた山があり、川によって浸食された部分で観察される安山岩の割れ目に充填されている鉱物の一つが、蛋白石である

という。そこは滝名川安山岩と呼ばれる安山岩地帯で、確かに、崖や川岸、川底を観察すると、多数の脈が確認できる（写真3）。脈を成す鉱物は、玉髄、沸石、蛋白石に区別され、葛丸川沿いで玉髄等が確認できるのは、この地点だけだという。照井が蛋白石の可能性が高いと指摘したものを写真4として提示するが、確かに、蛋白石のように見える。長年、岩石標本を作成してきたノーベル社社長の土屋氏にお見せしたところ、やはり蛋白石に見えるとのことであつた。

ただ、結論を先に述べるならば、写真4の安山岩中の鉱物は蛋白石ではない。石英である。同地点で採取した標本を、国立科学博物館・鉱物科学研究グループの宮脇律郎研究主幹に鑑定依頼した結果、「光学顕微鏡下での薄片の観察では、非晶質部分が多いことが判りましたが、X線回折図形にはquartzの反射しか見られません。結晶質の部分はquartzと判断されます。非晶質が多いため、quartzの反射強度が大きくありません。略「玉髄（chalcodony）」と呼ぶべきもので、残念ながら「蛋白石」ではありませんとのことであつた。

ここで問題となるのが、専門家ですら肉眼での鑑定では蛋白石と判断されるほど微妙な鉱物を、もし賢治が見た場合、どのように判断しただろうかという点である。テキストからいえることは、「なかなか、流紋玻璃にも出っ会はさないと檜ノ木大学士にいわせている点が重要で、このことは、賢治が蛋白石の採取できる岩石を「流紋玻璃」と考えていたことを示している。「流紋玻璃」とは玻璃（ガラス）質の流紋岩ということであろう。ガラスは二酸化珪素に金属の酸化物が化合したもので、蛋白石と同じ非晶質である。ガラス質の流紋岩には黒曜石や、真珠岩、松脂岩などがあり、実際、真珠岩中に蛋白石の生成される例は多い。賢治が葛丸川の安山岩中の蛋白石（実際は石英）を採取したことが、本作創作のヒントになっていると仮定した場合、蛋白石と流紋岩との関係がとぎれてしまうことになり、三ツ鞍山周辺説の難点となる。

現時点で考えられることは三つの選択肢である。賢治は三ツ鞍山近くの蛋白石（実際は石英）に気づかなかった。気づいていたが蛋白石と判断しなかった。蛋白石と判断していた。私は、の解釈に立つて本稿

を進める予定だが、その根拠については、次節で説明したい。

なお、葛丸川ダム附近の流紋岩地帯は、蛋白石の採れる可能性はないように観察される。蛋白石を産する流紋岩は、球顆流紋岩と呼ばれる種類に多い。しかし、そのような流紋岩を崖の露頭や川原の石から見出すことができないからである。だが、ダム手前の小檜沢との合流地点では真珠岩（流紋岩の一種）質の岩石が確認できる（写真5）。したがって、葛丸川附近の流紋岩から蛋白石発見の可能性を百%否定できるわけではないが、現実として流紋岩中から蛋白石（らしきものも含めて）は発見されていない。

三 賢治と蛋白石

今でも思い出すのは、学校の休日は雨が降ろうが風が吹こうが殆ど戸外で岩石・植物の採集。宮沢君がハンマーで採って「萩原君これが蛋白石だよ」と示された事。

（萩原弥六）

『宮沢賢治とその周辺』（川原仁左工門編著、改

訂版、昭48・4）

賢治は盛岡高等農林に入学するや、すぐに同級生を引き連れて、岩石・鉱物採集に出かけたとされるが、その行動範囲を推定してみたい。萩原弥六の見せられた蛋白石は、おそらく、その行動範囲の内にあったと推定が可能だからである。岩石・鉱物採集を賢治に誘われた友人の一致した記憶は、徒歩での移動であり、夏休み等は別として、土曜の午後か日曜、場合によっては土曜の午後から日曜にかけての一泊だったようである。したがって、行動範囲は盛岡近郊ということに限定されるだろう。山中泰輔は「私も日曜日等には盛岡の西南にある南昌山の辺りや、鬼越山から小岩井農場を通って繋温泉辺りをよく歩き廻った。また、岩手山へも宮沢さんと登山した」（同前）と記憶しており、岩手山、雫石、七つ森、石ヶ森、毒ヶ森、沼森、大沢峠、箱ヶ森などが行動範囲に入っていたと考えられる。

盛岡近郊で蛋白石を産出する可能性のある地域は、おそらく無いのではないかというのが私の結論であ

る。「盛岡附近地質調査報文」(共同執筆：盛岡高等農林学校農学第二部二年生)を確認しても蛋白石産出の記述はなく、「流紋岩」の記述部分からも、蛋白石の産出を暗示する要素は見あたらない。

ただ、当時の蛋白石の解釈が、現在とはやや異なっており、その違いについて注意しておく必要はあるだろう。理学士大築仏郎・理学士八谷彪一著『鉱物学』(帝国百科全書、第一三三編、博文館、大3・2)の「瑪瑙」の項目を見ると、「縞状玉髓にして玉髓、蛋白石、石英等相重り帯状をなすあり」と記され、農学土小倉延足口述『鉱物学講義 全』(新選百科全書第百三編、修学堂書店、大4・6)の「瑪瑙」の項目でも、「縞ヲナス玉髓ニシテ玉髓蛋白石石英等相重リテ帯状ヲナシ」とある。これらのことから、瑪瑙の縞の白色部を蛋白石と判断する考え方がかなり一般的であったことが窺える。つまり、瑪瑙を産出する所であれば、瑪瑙に含まれて蛋白石も産することになるのである。このように蛋白石の解釈を拡大すれば、大沢峠附近や鬼越坂付近、繋温泉付近、南昌山付近も蛋白石の産地ということになる。

「盛岡附近地質調査報文」(同前)の「安山岩質凝灰岩」の記述には「図幅の西北部篠木坂及鬼越坂附近に産す、緑灰色若は暗灰色にして外観風化したる普通安山岩に酷似す往々其間隙に玉髓を充たす」とある。通常この地層は「飯岡層」とよばれ、輝石安山岩から成るとされている。安山岩質凝灰岩という岩石名の判断が正しいかどうかを判ずる能力を私は持たないが、もとは海底噴出物の安山岩質マゲマであり、まったく凝灰岩的要素を伴っていないとはいえないかもしれない。岩石命名の是非はともかくとして、鬼越坂付近が江戸時代より知られた玉髓の産地であることは確かなことである。したがって、輝石安山岩の間隙から、瑪瑙と呼ぶにふさわしい玉髓が産出しないともかぎらない。私の経験では、御所ダム(着工/昭和42、竣工/昭和56)附近から採取される玉髓には瑪瑙とよべるものが多く(写真6)、それらの瑪瑙の縞の白い箇所を蛋白石と捉えている人々が現在でも多い。『岩手大学ミュージアム年報』の(2004年度)第3回研修実施要項(「賢治オパールの旅」企画)2004・10岩手ミュージアム解説ボランティアの会)によれば、

「御所ダムサイトのオパール」とある。この場合のオパール（蛋白石）も、瑪瑙中のものを指している。

賢治がどのように蛋白石を捉えていたのか。盛岡近郊で、萩原君「これが蛋白石だよ」といったとするなら、瑪瑙を採集した際に、白い部分にハンマーを当てた可能性も考えられるだろう。

一方花巻近郊ならば、蛋白石を確実に採取することができる。比較的流紋岩地帯が多くあり、私は実際に花巻温泉近くの万寿山で、ガスの抜けたあとを残す赤みを帯びた流紋岩から蛋白石を採取した（写真7）。それが蛋白石であることは、国立科学博物館（前出）の鑑定により科学的に証明されている。また、豊沢川流域の球顆流紋岩からもまれではあるが蛋白石の採取されることが、地元の地質学者・照井一明（理化学博士）によって、明らかにされている。

また、賢治の蛋白石の定義を推定する上で、見落とすことのできないテキストが『台川』である。『台川』は農学校の教師である賢治と思われる人物が、生徒を引率し地学実習をしている様子を描いたものである。幻想的な面もあり、必ずしも実際にあったことをその

まま再現しているわけではないと思われるが参考になる。

うん。あるある。これが裂罅^{れつが}を温泉の通った証拠だ。玻璃蛋白石^{はりたんぱくせき}の脈だ。

「こゝをこらんなさい。岩のさけ目に白いものがつまつてゐるでせう。これは温泉から沈澱したのです。石英です。岩のさけ目を白いものが埋めてゐるでせう。いゝ標本です。」みんなが囲む。水の中だ。

「取らへないがべが。」（以下略）

「」は賢治の発話を意味し、地の文は賢治の心内語である。生徒の発話は「」で表されている。ここから理解されることは、賢治は「玻璃蛋白石」と「石英」を同義に用いていることである。

白く岩に傷がついた。二所^{ふたところ}ついた。

とれる。とれた。うまい。新鮮だ。青白い。

緑簾石^{りょくれんせき}もついてゐる。さうぢやないこれは苔

だ。(い)ですか。これは玻璃蛋白石^{はりたんぱくせき}です。温泉から沈澱したのです。晶洞もあります。小さな石英の結晶です。持っておいでなさい。」

蛋白石と石英が同じであることはありえないので問題は「玻璃」の解釈にかかってくる。「玻璃蛋白石」は一般的には「Glass-opal」のことと考えられ、無色透明な蛋白石のことを指す。「玉滴石」(Hyalite)という透明の小さな粒状上の蛋白石を「Glass-opal」と呼ぶこともある。ともかく、「Glass-opal」としての定義を「玻璃蛋白石」に当てはめると、本文の理解が不能になってしまうことになる。『台川』を地学的立場から読み解いている宮城一男は、その著書『宮沢賢治の生涯 石と土への夢』(筑摩書房、昭55・11)で、「手に手に美しい石英や蛋白石の標本を持って帰路を急ぐ生徒たち」と記している。宮城がこのような文を書くことを示している。「玻璃蛋白石」と「石英」との関係について、宮城はまったくこだわりのもっていないのである。

私見では、おそらく賢治は「玻璃蛋白石」の語を、かなり自由に、いわば賢治流に用いていると判断すべきと考えている。したがって、仮説の域を出るものではないが、次のような解釈の可能性を提出したい。

すでにふれたことだが、玻璃とは通常 ガラス を意味する。しかし、本来的には 水晶 を意味する言葉である。前出の『鉱物理学』(大3・2)、『鉱物理学講義 全』(大4・6)でも、「玻璃」を二種に分け、結晶質の水晶類各種と、非結晶質の玉髄や瑪瑙、碧玉など、に分類している。ここでの「玻璃」の定義にしたがうならば、「玻璃」とは「石英」のことといって何の不都合もないことになる。「玻璃蛋白石」とは、石英質の蛋白石というような意味になるのである。このような蛋白石は、本来「瑪瑙蛋白石」(Agate-opal)と呼ばれるべきかと思われる。地質学雑誌第17巻203号掲載の中尾清蔵著「蛋白石概論」(明43・8)に、「瑪瑙蛋白石」の解説がある。それによれば「瑪瑙と蛋白石との混ぜるものにて特に瑪瑙構造を呈するものを云ふ」とあり、つまり、瑪瑙中の白い編模様部分を蛋白石と呼ぶことと同じである。おそらく賢治は、石

英脈の白い箇所を蛋白石の脈と判断したのだろう。当時の蛋白石の定義からすれば、十分定義の範囲内での用法といえるのである。原稿の初期段階を調べると、一度「蛋白石」と書いてから「玻璃」の語を付け加えたことが確認できる。おそらく賢治としても「蛋白石」と「石英」がまったく同じことになる不自然さを避けるため、「玻璃」の語を付け加えたとの推定が可能である。ただし、「玻璃蛋白石」の語を用いたことはこの場合正しくなく、混乱をまねく原因となっている。

さて、このように蛋白石の定義を拡大して解釈するなら、葛丸川の三ツ鞍山付近で採取される白い石英の脈も、賢治にとっては十分「蛋白石」の一種として認識された、と判断できることになる。

「檜ノ木大学士の野宿」の末尾近くに次のような会話がある。

「うん探して来たよ、僕は一べん山へ出かけるともうどんなもんでも見附からんと云ふことは断じてない、けだしすべての宝石はみな僕をしたつてあつまつて来るんだね。いやそれだから此度な

んかもまったくひどく困つたよ。殊に君注文が割合に柔らかな蛋白石だらう。僕がその山へ入ったら蛋白石どもがみんなざらざら飛びついて来てもつどうしてもはなれないじゃないか。それが君みんな貴蛋白石プレジァスオパールの火の燃えるやうなやつなんだ。略

「はあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、そのお持ち帰りになりました分はいづれでございますか。一寸拝見をねがひたう存じます。」

それに対し「大学士はごく無雑作にノ背囊をあけて逆さにした。ノ下等な玻璃蛋白石がノ三十ばかりころげだす」となり、物語は終末をむかえる。ここの会話で注目されることは、檜の木大学士が「注文が割合に柔らかな蛋白石だらう」というところである。

貴蛋白石プレジァスオパールならずとも通常の蛋白石は、モース硬度6前後である。「柔らかな」とは、水晶の7やルビーの9に比してのものである。ところが、「瑪瑙蛋白石」（賢治の用法では玻璃蛋白石）の硬度は、石英の関係でお

そらく7近いはずである。櫛ノ木大学士は、蛋白石の硬度からも、採取段階で「玻璃蛋白石」が「下等」なものであったことを知っていたと思われる。

四 国内の蛋白石

賢治は、玻璃蛋白石が、決して宝石としての蛋白石になり得ないことを、十分承知していたはずである。ここでもう一度、櫛ノ木大学士が、「極上等の蛋白石」採取の依頼を受けたときの場面を振り返ってみよう。櫛ノ木大学士がチャイアントーム会社からルビー採取の依頼を受けたとき、ルビーの本場であるビルマ（現・ミャンマー）に出かけているのである。それがその場かぎりの法螺話であったとしても、知識としては正しいものであった。ならば、蛋白石採取の依頼を受けた場合、櫛ノ木大学士はどこに向かうべきだったのか。大正時代の常識でも櫛ノ木大学士はオーストラリアかメキシコに向かうのが宝石探しのプロとしての採るべき判断であったはずである。しかるに、なぜ櫛ノ木大学士は迷うことなく国内での採取を決断で

きたのか。国内にまったくあてのない状況ならば、物語自体のリァリティーがなくなってしまうように思うのだが…。

物語の、「野宿第三夜」の冒頭に、櫛ノ木大学士の次のような台詞がある。

（どうも少し引き受けやうが軽率だったな。グリーランドの成金がびっくりする程立派な蛋白石などを、二週間でさがしてやらうなんてのは、実際少し軽率だった。

どうも斯う人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いてみると東京のまちのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いゝ加減の法螺を吹いたことが全く情けなくなっちまふ。

櫛ノ木大学士の「立派な蛋白石」探しは、基本的には「いゝ加減の法螺」に近いものであったが、「二週間でさがしてやらうなんてのは、実際少し軽率だった」の言い回しからは、国内で「立派な蛋白石」が採取できる可能性が皆無であるとも考えてはいなかつ

た、との解釈が可能である。運が良ければ「立派な蛋白石」が採取できるかもしれないのである。

どうだ、この頁岩の陰気なこと。全くいやにな
っちまふな。おまけに海も暗くなつたし、なかなか、
流紋披璃にも出つて会はさない。

この台詞からは、樺ノ木大学士が「流紋披璃」中から蛋白石を採取しようしていることが理解される。「立派な蛋白石」を採取するには、まず「流紋披璃」を探し出さなければならぬのである。このことも前にすこしふれたが、玻璃（ガラス）質の流紋岩が蛋白石を含んでいる可能性が高いのである。オーストラリア産の蛋白石は砂岩中に生成したもので、最高級品といわれるブラック・オパールの場合も同様である。ハンガリー（スロバキア）産のものは安山岩、または安山岩質凝灰岩中の生成で、やはり流紋岩に合致しない。流紋岩中の蛋白石ならば、メキシコ産ということになるだろう。賢治が詩「函館港春夜光景」で用いた「火蛋白石」の語は、ファイヤー・オパールのことで、メ

キシコ産の代表的な蛋白石であり、流紋岩中より採取される。

では、国内産はどうか。明治初期より知られている蛋白石の産地は、現在の石川県小松市菩提町（赤瀬より運んだものとされる）である。

明治37年刊行の和田維四郎著『日本鉱物誌本論』（第1版）では、「加賀江沼郡菩提（及那谷）は蛋白石の主産地にして粗面岩及び凝灰岩中にありて殆ど玉滴石に類する形質を有するものあり、其色は白又は淡青にして岩石の表面を掩ひ其外面鍾乳状を呈するもの多し、又青色不透明にして恰も支那玉の如く玲瓏たるものあり、稍々多量に産するを以て製作に供用せらる」と記されている。全体として木化蛋白石や玉滴石の記述が多く、粗面岩（流紋岩）中の蛋白石に関しては、石川菩提産のみが注目されている（写真8）。この時点での蛋白石の用途は、宝石用ではなく、装飾品としてであった。

宝石用の蛋白石が国内で発見、採掘されるようになるのは、明治も四十年代になってからである。『日本鉱物誌本論』の改訂版にあたる明治四十年刊行の『本

邦鉱物標本』では、岩代河沼郡宝坂村屋敷産として、「蛋白石の火山岩中に稍球状をなして介在するものにして淡青色半透明なり（新、参考）」と記されている。これが、世界に唯一通用するといわれた国内産オパール（現在・福島県西会津市宝坂）に関する、最初の記述である。大正五年の『日本鉱物誌』（第二版）では、「岩代国宝坂の蛋白石は真珠岩中にある球体中の空隙に不規則なる形又は算盤玉状をなして産す。無色透明より白色灰色、淡黄色、淡青色、半透明に至る、就中白色半透明のもの最も多し。／時にオパール燦光を呈する貴蛋白石を産す」と、記述も詳しく正確になつていく。ことに「オパール燦光を呈する貴蛋白石を産す」の記述が重要で、これにより宝石用のオパールの産出することが理解されるのである。

ここで私は、福島県宝坂産の蛋白石の存在が、樺ノ木大学士に国内での採取に踏み切らせたのではないかという仮説を提示しておきたい。

教科書類での福島宝坂産蛋白石の記述を追つてみる。まず、賢治が盛岡中学校時代に使用した「鉱物」の教科書（理化学博士神保小虎著『普通教育鉱物界教科

書』開成館、明40・10、修正第7版）であるが、ここでは蛋白石そのものが扱われていない。大正時代に入ると、国内産蛋白石の記述が見え始め、前出の『鉱物学』（大3・2）に、蛋白石の産地として、「我邦においては半蛋白石を主として岩代河沼、駿河富士山麓、加賀那谷とす（略）外国に於ては貴蛋白石は、ハンガリー、クイーンズランドに産し（略）其の他は処々に産す」との記述を見ることが出来る。この記述から理解されることは、国内産は「半蛋白石」（粗悪な蛋白石のこと）しか産出せず、宝石として取引される貴蛋白石は、ハンガリー産かクイーンズランド（オーストラリア）産か、ということになっている。その点、大正二二年刊行の神保小虎著『晩近 鉱物学教科書』（開成館）では、蛋白石は石英と同じく珪酸であるが、水分を含んで非結晶質である。色は白、灰、黄、褐など種々である。乳白色、の蛋白石で、見る向によつて種々の美しい色彩を現すものを、特に貴蛋白石といふ。宝坂（福島）に産する」と、蛋白石の産地として福島県宝坂のみを提示している。このことは、当時、宝坂が国内を代表する蛋白石の産地として認知

されていたことを意味するだろう。

鈴木敏編『宝石誌』（思文社、大5・4）を見てみると、

我国に在て本邦所産の蛋白石を宝飾に使用せしは明治の時代にして、明治四十年頃東京に宝石株式会社なるものを設け、蛋白石に七種の名称を附し販売せしものは専ら其原石を岩代宝川産に仰ぎ、其の発見は明治三十八年頃とす、同社は特有の琢磨機を備へ、加工して大に蛋白石の販路に努むるのみならず、尚ほ進んで資金を増し、蛋白石の外、他の宝石を原石の倂外国より購ひ、之を彫琢し、以て輸入製作品の防遏を企てしが不幸にして失敗に終りたるやを耳にせしは頗る遺憾とす。

福島県宝坂産の蛋白石を見ることは現在でも可能である。私もその地で蛋白石採取をしたことのある一人だが、鉱山の所有者の藤原清鬼氏の許可と入山料が必要である（写真9～11）。私がこの産地に特に注目

するのは、蛋白石を産出する母岩が真珠岩（流紋岩の一種）であることである。『樺ノ木大学士の野宿』の初期形が「青木大学士の野宿」であることはよく知られていることだが、『青木大学士の野宿』の原稿を確認してみると、流紋披璃のところは、初め 真珠岩 と書かれ、それが 流紋披璃 と書き直されていることが分かる。真珠岩はまさに玻璃（ガラス）質の流紋岩である。偶然の一致かもしれないが、福島宝坂産の貴蛋白石も真珠岩中より産出するのである（写真12）。大学士のねらいが真珠岩にあったことは、宝石の専門家として正しいのである。明治四八年、日本地質学会「地質学雑誌」（第15巻）に発表された大築洋之助の論文「福島県河沼郡宝坂村産貴蛋白石」によれば、真珠岩中から「貴蛋白石（Precious-opal）」の産出することが明確に記されている。ただし記載に一部理解不能（印刷段階でのミスか？）の箇所があるので、同内容を掲載した「地質調査報告」第4号（農務省技師大築洋之助、1908）を本文として以下に引用、紹介する。都合により、片仮名部分を平仮名に改め、句読点を適宜補った。

福島県河沼郡宝坂村大字宝川小字屋敷字足沢に貴蛋白石を産す。明治三十八年十一月頃の発見に係り目下東京宝石株式会社之を採掘せり。該産地若松市より新潟県東蒲原郡津川町に至る街道の一駅宝川とその東方東峠との中間を北走する兔光頭川の上流にして真珠岩(Pelite)より成る。

真珠岩は微弱な真珠光沢を放ち、緑黒色(風化面黝色)にして、甚脆く、馬鈴薯状の団塊を包裹するをもつて著しい。該団塊は黒色或は褐色堅緻披璃様石基に通常無色長石の斑晶を散布す。形状多くは球に近く直径約六寸なるを最大とし一寸乃至一寸五分のものを普通とす。その表面は常に乳房状態(Mammillary)にして時に同じ石質の小球、時には苔状滴傘鉾(Dendrite)を付着す。母岩と団塊の結合頗る弱く鉄槌一撃にして割然両者を分かつべし。

団塊は堅実または中空なものありと雖も多くは玉髓あるいは種々の蛋白石を胚胎し球状あるいは算盤珠形をなして中央にいるものと多少扁

豆形にして外部に偏するものありて、後者比較的多しという。這般蛋白石は乳蛋白石(Milk-opal)、蛋白石瑪瑙(Opal-agate)、貴蛋白石(Precious-opal)、披璃蛋白石(glass-opal)、黒曜石に似たるもの、黄綠色にして蠟様のもの等にして数種の蛋白石一母岩中に共生す。略

「真珠岩」という一致のほか、偶然の一致にしてはできずと思われる一致がもう一つある。産地の「屋敷」の隣部落が「櫛ノ木平」なのである。櫛ノ木大学士の「櫛ノ木」である。国土地理院(当時、大日本帝国陸地測量部)「野沢」(大正二年測図同五年製版)に、「宝石鉞」の文字と鉞山記号が記されている(図)。もし、賢治が、すでに紹介した諸文献(教科書・論文・研究書)の一つでも目にしていたとするなら、大正二年版地図「野沢」を見たのではないかという可能性が生じてくる。地質調査を繰り返していた賢治にとって国土地理院(同前)の地図は必需品の一つであり、その気になりさえすれば容易に入手でき、「屋敷」地区の「宝石鉞」を確認することができたはずだ。賢治が

その時、「宝石鉱」のある「屋敷」の隣部落の名「榎ノ木平」に気づき、決して「宝石鉱」にたどり着くことのない「榎ノ木大学士」というキャラクターをイメージしたと仮定してみたらどうだろう。「青木大学士」から「榎ノ木大学士」という名前の書き換えもたんなる気まぐれでないことが見えてくるのではないだろうか。

また当時、宝坂の蛋白石は、上野の帝室科学博物館に数点寄贈されており（写真13）、賢治が実物を目にしていた可能性も想定できる。

なお、私は、鉱山の持ち主である藤原清鬼氏から、鉱山の歴史や産出した「貴蛋白石(Precious-opal)」に関し、貴重なお話を聞かせていただくことができた。しかし、鉱物の専門家の秋月瑞彦が、すでに聞き取り調査をなさっており、『虹の結晶 オパール・ムーンストーン・ヒスイの鉱物学』（裳華房、平7・7）を読めば知ることのできる内容であった。ほとんど私の付け加えることのないことも了解された。そこで、秋月氏の文章を引用させていただく形で、福島県宝坂産蛋白石の興味深い歴史を紹介したいと考える。

藤原さんの話を、できるだけ忠実にここに述べよう。

ずーっと以前、村人の間ではこの小石は天狗の投げ石と呼ばれていた（図省略）。この茶褐色の小石を割ると、オパールが出てくる。このことは村人の中で話題になっていたが、明治37年、ゼンマイを買いに来た人の耳に入った。彼はこのオパールを携えて東京まで出向いた。しかし、適当なスポンサーが見つからず、疲れはてて旅館に戻り、入り口に置いておいた。このオパールが、辻輪某なる人の眼に止まった。

彼はこのオパールに大変興味を抱き、とうとうオパール鉱山の地上権を手に入れた。その頃、まだ採掘権は確立しておらず、家屋敷と同じく地上の権利だけが存在していた、努力のかけがえがあり、きれいなオパールが次々と発見され、多くの人夫が入り、大規模な採掘が始まった。

ところが辻輪はある会社のガス灯の設計図を盗み、別会社へ売ったかどで捕まってしまった。

産業スパイである。そのために鉱山の運営もうまくいかない。明治40年、「台湾の匪賊征伐」から帰った鉱山管理人、藤原彦四郎の友人が新たなスポンサー探しに奔走したかきがあり、蜂須賀、松平両皇族ともつながりができた。山の地上権は辻輪が持っていたので、刑務所まで出向き、8000円にてこの地上権を買い取り、明治40年、資本金15万円で日本橋に東京宝石株式会社を設立することとなった。

人夫が35名入り、7年間掘り続けて多くの立派なオパールを得た。狭い谷間に松の木を組み合わせて掘り出した岩石を滑り落とし、谷間に大音響を轟かせた。そのころがこの鉱山のもっとも華やかな時代であった。福井県小浜市は今でもメノウの細工で有名であるが、そこから技術者を呼び、オパールを加工させてかなりの売り上げがあり、鉱山管理人、藤原彦四郎もかなりよい思いをしたようである。

そのころ掘り出したオパールの行方はほとんどわからないが、近くの酒屋には若干のオパール

が残っている。人夫が持ち出して酒と交換したときのものである。略。

今まで掘り出したオパールのもっとも大きいものは、薄いもので直径10cmほどにも達し、厚いものでは5cmの立派なものだったようである。掘り出したものはすべて加工されて売られた。それは今でも同じで、藤原家にはほとんどよいものは残っていない。ときには水分の多いものが加工後に割れてしまい、買っていた人たちが苦情が出て、別のオパールで埋め合わせをしなければならなかった。

現在の事実上の鉱山主は彦四郎氏の孫、藤原清鬼さんで、採掘権も正式にとり、農閑期には一人でこつこつと掘っている。ときには2、3人の人夫を入れて掘ることもあるが、オパールの採掘を仕事としてではなく、他の家の男たちが出稼ぎに行く間に、楽しんでしているように見える。冬場、天井の高い奥行き10数mの坑道内の空気は乾燥し、掘るのに快適である。宝石になりそうなオパールは500個に1個すなわち0.2%の確率だそ

うで、かなり根気のいる仕事である。しかし、よいオパールは狭い範囲に集まっているので、時にはいくつもいくつも、真つ赤なオパール」が岩石から飛び出し、持ち帰ったオパールが机の上いっぱいになり並ぶこともある（図省略）。

私に付け加えられることは、「辻輪某」なる人物が「知々和直政」という名であったことくらいである。また、オパールの製品はあまり国内市場には出回らなかったようだ、とのお話も伺った。出資者が宮家であり、どのようなルートで販売されていたか分からないことが多いそうである。それにしても、十五万円の資本金（明治四十年代）を現在の価値に換算したなら十億円を超える金額になるのではないだろうか。いかに期待されたオパール鉱山であったかが窺われる。そして、「薄いもので直径 10 cm」「厚いものでは 5 cm」というようなオパールが採掘されていたとするなら、おそらく「グリーンランドの成金」も満足したのではないだろうか。プレシヤスオパールの出る確率も当時は二割あったことが、前出の大築論文から知ることがで

きる。

福島宝坂の「オパール鉱山」の実質的な活動期は、明治四〇年から大正二年までの七年間であった。賢治が「樺ノ木大学士の野宿」を執筆したと推定される大正一二年頃は、鉱山としてオパールの採掘はされていなかったと考えてよい。しかし、国内に世界的に通用する「貴蛋白石（Precious opal）」産地の存在していたことを知ったことだけで、十分に賢治の地学的想像力は刺激されたことだろうと思う。その結果として、賢治は第二の「宝坂」を岩手県内に設定し、樺ノ木大学士という法螺吹きが、「下等な」「玻璃蛋白石」しか見つけられない喜劇を作り出したのではないだろうか。岩手県内の「流紋岩玻璃」の岩石に一抹の期待を残しながら……。

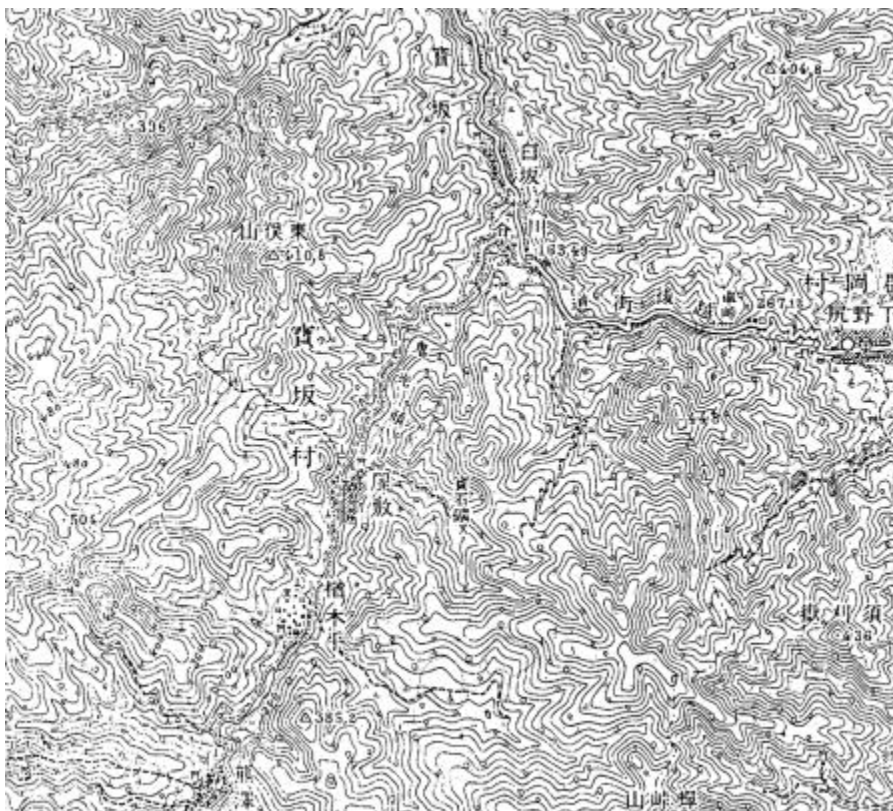


図 大日本帝国陸地測量部「野沢」5万分の1 (大正2年測図同5年製版)



写真1 ビルマ（現ミャンマー）モゴック鉱山のルビー



写真2 葛丸川上流の流紋岩



写真3 安山岩中の石英脈



写真4 蛋白石によく似た石英脈



写真5 葛丸川の真珠岩質岩石



写真6 御所ダム付近産のメノウ



写真7 花巻万寿山産蛋白石



写真8 石川県赤瀬産蛋白石

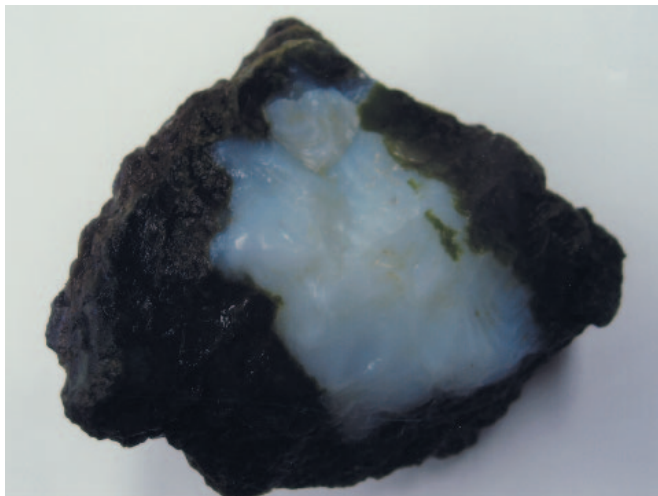


写真9 福島県宝坂産蛋白石（1）

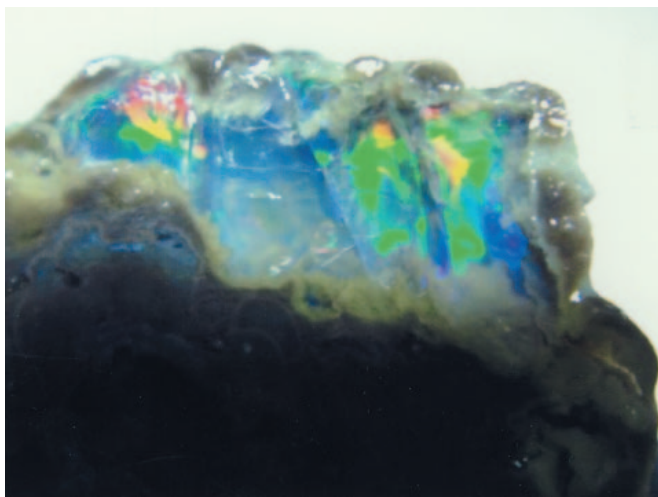


写真10 福島県宝坂産蛋白石（2）

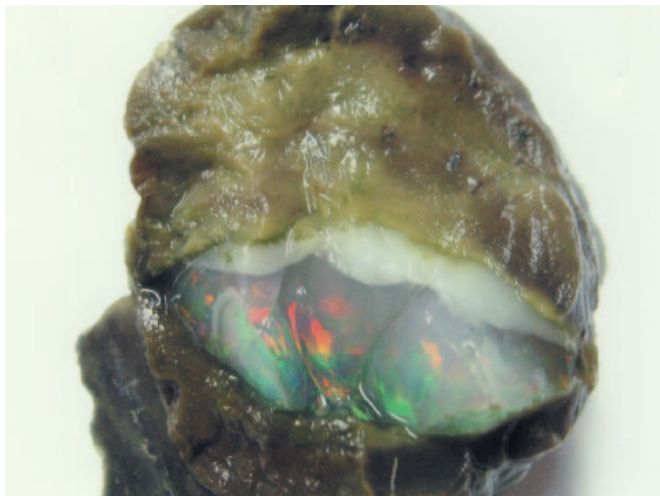


写真11 福島県宝坂産蛋白石（3）

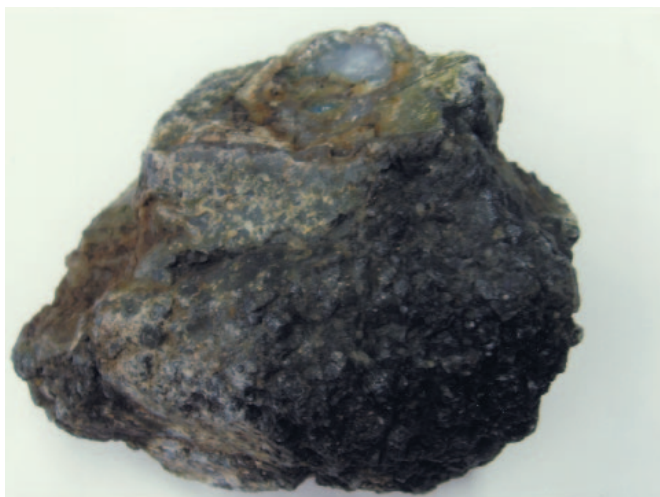


写真12 福島県宝坂の真珠岩 上部に蛋白石

年	月	日	氏名	備考	金額	備考
1861	10	10	下野等	御朱印	5.0	
1862	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1863	10	10	河沼郡		1.0	
1864	10	10	信濃		1.0	
1865	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1866	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1867	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1868	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1869	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1870	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1871	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1872	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1873	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	
1874	10	10	岩代安達郡秋田村		1.0	

写真13 現・国立科学博物館所蔵 収藏品一覧（オパールの頁）

第二部、発展編・ジャータカと地学

一 「手紙 一」とジャータカ

ジャータカ(釈迦前生譚)の内容を持つ「手紙 一」が、創作ではなく『大智度論』巻一四が出典となっていることを明らかにしたのは古宇田亮延(「『手紙 一』について」「賢治研究」第5号、昭45・8)である。この指摘は意義あることで、早くは久保田正文が「これはパーリ語(仏教の古典語でサンスクリットと共に現在は死語)の經典中にある話で、全体を『じゃあたか』本生譚という。本生譚は釈迦の過去について言った事で古代印度人の作で五四七話ある」(「四次元」第5号、昭29・5)と指摘しているが、パーリ語によるジャータカは南伝仏教と呼ばれ、賢治の時代には読むことができなかった文献である。『南伝大蔵経』の翻訳作業は、一九三五年(昭和10)から四一年(昭和16)にかけて高楠順次郎博士功績記念会で行われている。おそらく、久保田正文の念頭にあったパーリ語原典のジャータカは、第五二四話「サンカパーラ竜王

前生物語」であると思われる。『大智度論』巻一四の話ほど細部の一致は見られないが、戒をたてた竜王が、自分の皮や肉を蟻や獺にきた村人に布施するという基本的なパターンは一致している。

久保田の指摘はそれなりに意義のあることではあるが、研究上重要なことは、「手紙 一」の典拠が漢訳の仏書から見出されたことにある。古宇田の見出した、典拠としての『大智度論』は、『国訳大蔵経』(国民文庫刊行会、大8・6)に収められており、賢治が読んでいたことの確実な仏書である。『大智度論』は『摩訶般若波羅蜜多經』の注釈書で多くの仏典からの引用があり、「手紙 一」は『蘇陀蘇摩王經』からのものであることを古宇田は記している。賢治が『蘇陀蘇摩王經』を直接読んでいたかどうかは不明である。

さて、日蓮の手紙にも、薬王菩薩の焼身焼臂や薩王王子の捨身飼虎、尸毘王が鷹に追われた鳩の代わりに身体をさし出す話など、漢訳仏典を典拠としたジャータカが引用されているし、説話文学の中にジャータカの含まれている例も少なくない。したがって、「この

はなしはおとぎばなしではありません」との断り書きをもった「手紙 一」ほど明らかな一致でないにしろ、賢治作品にジャータカの要素を見出せること自体はむしろ自然なことで、たとえば、王様が登場する話など、ジャータカ的世界観を前提にしていると考えると納得しやすくなる。「手紙 一」もそうであるが、「双子の星」「貝の火」「十力の金剛石」「カイ口団長」「学者アラムハラドの見た着物」「竜と詩人」などがそれぞれであり、さらに、王様は登場しなくとも主人公が身を捨てる（犠牲になる）話は、そのままで、ジャータカ的である。「よだかの星」「オツベルと象」「銀河鉄道の夜」「グスコープドリの伝記」などがそれにあたる。

ただ、賢治作品とジャータカとの関係は一ひねり、二ひねりされているように思う。賢治の創作するホモイ（「貝の火」）や 白象（「オツベルと象」）、鳥捕り（「銀河鉄道の夜」）などは、きわめて人間くさい存在であり、ジャータカの枠組みから微妙にはずれたものといえる。その分彼らの行動は、読者の心に消化不良のような違和感を残すことになる。その点に

関し、たとえば、人間的弱さをもったキャラクター群は、釈迦になり損ねた者たちの話だと解釈することにより、読者の違和感はいぶ解消されることになるのではないか。このような視点は、一般に《テクノボ》と呼ばれるキャラクター群を相対化する作用をもつもので、賢治作品の読みの巾を広げることになり、賢治文学の本質の一端に近づくことが可能になるように思うのである。そして、わたしたちがそこで見いだすものは、おそらく、法華信者賢治の自己認識の厳しさというものである。

二 「貝の火」とジャータカ

うさぎのホモイを主人公とする「貝の火」の内容を簡略にたどると、ホモイが、川で溺れているひばりの子供を助けたことにより、王様から 貝の火 を授けられることになるが、結果としては、 貝の火 は碎け散り、その破片によりホモイは失明する、という話である。いうなれば善因悪果の話で、その理不尽さに童話とは思えないやり切れなさがある。

ある日、助けられたひばりの親子がホモイの家の前に現れる。

「私共は毎日この辺を飛びめぐりまして、あなたさまの外へお出なさいますのをお待ち致して居りました。これは私どもの王からの贈物でございます。」と云ひながら、ひばりはさっきの赤い光るものをホモイの前に出して、薄いうすいけむりのやうなはんけちを解きました。それはとちの実位あるまんまるの玉で、中では赤い火がちらちら燃えてゐるのです。

ひばりの親子は「私どもの王」の命令で 貝の火をホモイに届けに来たのである。なぜこの「貝の火」の物語に「王」が存在するのか。それはすでに確認したことが、ジャータ力的世界での物語だからである。久保田正文の説明をかりればジャータ力は「古代印度」の物語であり、そのため、全てのジャータ力は王様のいる世界で展開されているのである。また、ジャータ力を前提にすれば、動物が主人公の話も、単

なる寓話ではなく、釈迦の前世の世界をそのまま表したものである。

「これは貝の火といふ宝珠でございます。王さまのお言伝ではあなた様のお手入れ次第で、この珠はどんなにでも立派になると申します。どうかお納めをねがひます。」

ホモイは善行の結果として、王様から 貝の火という宝珠をもらうのであるが、この宝珠が一般に考えられる 褒美 からいかにかけ離れたものであるか、作品を読み進むうちに明らかになる。ホモイが王様からもらった宝珠は 褒美 などではなく 試験 にほかならない。それは言葉を換えれば、将来 仏 になることができるかどうかの 資格審査 である。

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰をあげてせはしくせはしく燃えてゐるやうに見えますが、実はやはり冷く美しく澄んでゐるのです。目にあてて空にすかして見ると、もう焰

は無く、天の川が奇麗にすぎとほつてゐます。目からはなすと又ちりりちりり美しい火が燃え出します。

ホモイの「お父さん」は、その宝珠が 貝の火 と呼ばれるものであること、またそれを保ち続けることの困難さを知っている点、確認しておきたい。 貝の火 がホモイに科せられた 試験 であることを表している。

「これは有名な貝の火といふ宝物だ。これは大変な玉だぞ。これをこのまゝ一生満足に持つてゐる事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだといふ話だ。お前はよく氣を付けて光をなくさないようにするんだ。」

また、ホモイの「おっかさん」も、 貝の火 のどのようなものであるかを知っており、次のようにホモイに知らせている。

「この玉は大変損じ易いといふ事です。けれども又亡くなつた驚の大臣が持つてゐた時は、大噴火があつて大臣が鳥の避難の為に、あちこちさしづをして歩いてゐる間にこの玉が山程ある石に打たれたり、まづかな熔岩に流されたりしても、一向きずも曇りもつかないで却つて前より美しくなつたといふ話ですよ。」

貝の火 を王様から贈られるには、それなりの善行が必要であり、ホモイがヒバリの子を命がけで助けた行為は、その善行にあたると判断されたのだろう。

貝の火 は「このまゝ一生満足に持つてゐる事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだ」という特別な宝珠であつた。鳥に二人、魚に一人というところがすでにジャータ力的である。鳥の二人のうちの一人は、おそらく「おっかさん」の話の中に出た「驚の大臣」であらう。ジャータ力に「驚の大臣」とそのまま重なる話はないが、釈迦の前世が鳥で、森が山火事になり仲間の鳥を避難させた話がジャータ力第三六話にある。もつ一人の鳥の候補を賢治作品から

挙げることができる。それは、童話「二十六夜」で語られる「疾翔大力」である。もとは雀だつたが捨身供養により、「火に入つて身の毛一つも傷つかず、水に潜つて、羽、塵ほどもぬれぬ」という存在（捨身大菩薩）になった。魚が釈迦の前世であつた話は賢治作品にはないと思うが、ジャータカでは第七五話「マツチャ前生物語」にあり、パリ語版ジャータカの場合、動物だけを取り上げても、象や猿、馬、犬、鹿、ライオン、鼠、鳩、鶉、鷺鳥、魚などが釈迦の前世の姿として語られている。

貝の火がどのようなものであるのか、宝珠であることから推定すれば、仏教でいうところの摩尼珠のようなもの、ひとまずいえるのではないかと考えている。摩尼珠は如意珠ともいい、織田得能著『仏教大辞典』（大倉書店、初版大6・1、縮版昭5・11参照）の如意珠の項では、「宝珠より種類の所欲を出すこと意の如くなるを以て如意と名く、竜王或いは摩竭魚の脑中より出づと云ふ。或は仏舍利變じて成ると云ふ」と記述されている。宝珠と竜王との関係については即座に「竜と詩人」に描かれる「赤い珠」を連想させる。

（略）もしわたくしが外に出ることができおまへが恐れぬならばわたしはおまへを抱きまた撫したいのであるがいまはそれができないのでわたしはわたしの小さな贈物をだけしやう。こゝに手をのばせ。）竜は一つの小さな赤い珠を吐いた。そのなかで幾億の火を燃した。（その珠は埋もれた諸経をたづねに海にはいるとき捧げるのである）

スールグッタはひざまづいてそれを受けて竜に云つた。

（お、竜よ、それをどんなにわたしは久しくねがつてゐたか わたしは何と謝していゝかを知らぬ。略）

「竜と詩人」では「赤い珠」の存在理由を「諸経をたづねに海にはいるとき捧げる」ためとしており、「赤い珠」がいかに価値ある宝珠なのかが理解されよう。おそらく、「竜と詩人」の「赤い珠」や 貝の火は、賢治の発想の根本のところ、摩尼珠・如意珠と繋が

っているのではないだろうか。「仏舍利変じて成る」（『仏教大辞典』）という記述も注目される。貝の火とは何かを考える上で「仏舍利」との関連は重要な示唆となるはずだ。

さらに、『仏教大辞典』には、如意珠に関し典拠となる仏典の本文（漢文）が記されており、興味深い内容が見出される。訓読に直して次に引用する。

【智度論十】に「如意珠、仏舍利より生ず。もし法の没し尽くすとき、諸々の舍利みな変じて如意珠となる。譬するに、千歳が過ぎ氷化して頗梨珠となるが如し。」

【智度論三十五】に「菩薩のごときは、先に国王の太子となり、閻浮提の人の貧窮を見て、如意珠を求めんと欲し、竜王宮に至る。竜すなはち珠を与う。この如意珠、よく一由旬雨を降らす。」

【智度論五十九】「ある人の言う。この宝珠竜王の脳中より出づ。人この珠を得るに、毒の害するあたはず。火に入りても焼くあたはず。これらのごとき功德あり。略」

引用は『大智度論』からのものにしばってみた。『寶藏經六』や『觀仏三昧経一』、『往生論註下』からの引用も見られるが、内容的に『大智度論』とそれほどの違いがなく、また、賢治の如意珠に関しての知識は、『大智度論』から得た可能性が高いと推定できるからである。

この『大智度論』の記述から新たに指摘できることが幾つかある。一つ目は、ホモイの母の言葉との関連である。賢治は「大噴火があつて大臣が鳥の避難の為に、あちこちさしづをして歩いてゐる間にこの玉が山程ある石に打たれたり、まっかな熔岩に流されたりしても、一向きずも曇りもつかないで却つて前より美しくなつた」と貝の火の堅牢さと美しさを強調したが、当然それは貝の火そのものの性質というよりは、「驚の大臣」の行為の貴さに支えられたものと解釈すべきだろう。【智度論五十九】によれば、珠を得た者は「毒の害するあたはず。火に入りても焼くあたはず」ということである。賢治は貝の火の堅牢さと美しさの保たれる条件として、それを持つ人の行為

性に基準を求めたのである。換言するならば、珠の絶対性ではなく、人の行為（善行）の絶対性、を物語の主題にしたのである。「鷲の大臣」の行為（善行）が絶対的なものであるのに対し、ホモイの行為（善行）は揺らぎやすいものであった。

「鷲の大臣」のような偉大な存在が【智度論三十五】に記されている。「太子」である。「太子」は「閻浮提」（われわれの住む世界）の人々を貧窮から救うため、海中の竜王のもとに宝珠を求めている。『仏教大辞典』（前出）に記述されている箇所さらに先を『国訳大藏經』（前出）で確かめてみると、その「太子」は将来 仏 になることを竜王から予言されている。このことはとても重要なことで、「太子」の話がジャータ力であることを示している。つまり、宝珠を得る者は 仏 になるほどの人物だということである。ならば 貝の火 を得たホモイも、『大智度論』の流れからいえば将来 仏 になってもよいはずなのだが、賢治は 仏 になり損ねた者 の話として「貝の火」を創ったのである。

むろん遠い未来においてホモイが 仏 になる可能

性が残されていないわけではない。ホモイの父親が盲目となったホモイに向かって、「こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかったお前は、一番さいはひなのだ」といった言葉からも窺えることである。

【智度論十】の記述にも興味深いところがある。二つ目の指摘となるが、如意珠は「仏舍利」からできているという点である。貝の火 も同様に「仏舍利」からできていると仮定すると、ホモイが盲目になったことは、形をかえた仏の慈悲と解釈できることになる。賢治の童話が「ありがたいほとけさんの教えを、いっしょうけんめいに書いたものだんすじゃ」（母イチへの言葉）とするなら、善因悪果という皮肉な話を賢治が創ったというよりも、迷いの多いわれわれの人生を直視したうえで、救いの可能性を見出そうとした作品ということになるだろう。

三つ目の指摘であるが、「赤い玉」に関し、「竜と詩人」で「（その珠は埋もれた諸経をたづねに海にはいるとき捧げるのである）」と記されていたが、【智度論十】の「もし法の没し尽くすとき、諸々の舍利みな変じて如意珠となる」の記述を知ったとにより、「赤い

玉」と「埋もれた諸経をたづね」ることとの繋がりが見え、理解しやすいものとなる。

四つ目の指摘は、「譬うるに、千歳が過ぎ氷化して頗梨珠となるが如し」の箇所にある。仏舎利すなわち仏の骨が如意珠に変化することを、氷が頗梨珠に変化することに譬えていることに注目したい。頗梨（玻璃）とは、水晶のことで七宝の一つに数えられている。西域特産のガラスを意味することもある。水晶とガラスは全く異なる物質であるが、「氷」のような透明感において共通している。「竜と詩人の「赤い珠」は、透明な水晶球のようなものが基本で、「そのなかで幾億の火を燃した」ことにより、結果として「赤い珠」のように見えるのである。「赤い珠」が透明の珠であると解釈できるなら、貝の火の特徴と一致することになる。「玉は赤や黄の焰をあげてせはしくせはしく燃えてゐるやうに見えますが、実はやはり冷く美しく澄んでゐるのです」や、「目にあてて空にすかしで見ると、もう焰は無く、天の川が奇麗にすぎとほつてゐます。目からはなすと又ちりりちりり美しい火が燃え出します」という表現は、まさに水晶球のなかで炎が燃え

ているイメージであらう。

水晶球のイメージに、仏舎利のイメージを加えるとうなるか。童話「ガドルフの百合」に次のような一節がある。

（うるさい。ブリキになったり貝殻になったり。しかしまたこんな桔梗いろの背景に、楊の舎利がりと立つのは悪くない。）

ガドルフは、楊の木がブリキのように、また貝殻のように見えるということに腹を立てているのであるが、それを舎利と捉え直すことにより、少し機嫌がなおまった様子が窺える。ブリキは鉄板にスズをメッキしたものであるから、錫色であり、銀白色といえるだろう。貝殻は白色といえる。先にもふれたが舎利は仏舎利のことで、仏の骨を意味する。貝殻と骨とはかなり似た色合い、質感である。貝殻から舎利への捉え直しは、連想の流れとして理解できなくはない。仏の足を描写したと思われる童話「ひかりの素足」の「貝殻のやうに白く光る大きなすあしでした」や、仏ではな

いが聖なる存在を描写したと思われる詩「小岩井農場パート九」の「その貝殻のやつに白くひかり／底の平らな巨きなすあしに」などの表現を例に加えれば、賢治における、仏 素足 貝殻 骨 仏舍利 仏というイメージの連鎖、循環を指摘することができる。

このようなイメージの連鎖、循環を前提に、貝の火という宝珠の成り立ちを推定してみるなら、仏舎利のイメージを媒介に、頗梨珠としての如意宝珠が貝の火 に転換されたと考えられるだろう。

三 頗梨珠と貝オパール

貝の火 の成立を前章とは異なる視点から考察してみたい。それは、貝の火 オパール説の検証でもある。頗梨珠を水晶球と仮定して、水晶球の内部で「赤や黄の焰をあげてせはしくせはしく燃えてゐる」という表現に合致するのは、オパールである。

原子朗著『新宮沢賢治語彙辞典』（東京書籍、平¹⁰・7）では、「蛋白石」の項に、蛋白石（オパール）は『貝の火』のモデル」であり、「メキシコ産ファイアオパ

ールをモデルにし」た可能性が記されている。一般にイメージされるメキシコ産ファイアオパールの場合、遊色を示しているも石自体が赤や黄に色づいているので（写真1・a、写真1・b）、石自体透明な 貝の火 の描写に当てはまらないのではないか。もっとも、透明な石できらびやかな遊色をもつメキシコ産オパールもあるので、それとの混同が問題を難しくしているかもしれない（写真2・a、写真2・b）。メキシコ産ファイアオパール説を採った場合、最大のネックとなるのは、貝 のイメージとつながらない点である。メキシコ産はすべて流紋岩（火成岩）中から掘り出されている。

また、同項目の記述に、砂岩から掘り出されるオーストラリア産貝オパールについての言及がみられるが、「貝の火兄弟商会」の語源としての紹介にとどまっており、もう少し踏み込んだ解説が求められよう。「貝の火」とオパールとの関係を最も早く指摘したのは、板谷英紀著『賢治博物学』（れんが書房新社、昭和54・7）だろう。「オパール」の章で、次のように述べている。

美しくしかももろい人間の善意を「貝の火」になぞらえて描く時、賢治はオパールのことを思い浮かべていたに違いありません。それはオパールがその美しさだけでなく、手荒に取り扱った時の末期の様子まで、貝の火にそっくりだからです。軟かいオパールは少し荒っぽく扱いますと、表面がザラザラに傷ついて輝きが鈍くなりますし、間違って火にさらしたりしますと、忽ちひびが入って白く濁った死塊と化してしまいます。この美しくしかもデリケートな宝石オパールは、日本名を貴蛋白石といふ普通の蛋白石と呼ばれますが、成分は同じ珪酸で瑪瑙や玉髄の親類に当る鉱物です。

板谷は、貝オパールについても触れているので、引用しておく。

実は茶目ツ気のある神はもつと手のこんだ作品をのこしておられるのです。それはオーストラ

リアで時々見つかる貝オパールです。学問的に言えば貝の化石の空洞をオパール分がうずめたものに過ぎないかも知れませんが、気の遠くなるほど遠い昔の生物の遺骸が美しい宝石に姿を変え、再び太陽の光の下に現われ出るといふ、大自然の輪廻の奇蹟そのものを前にして感動しない者はありませんまい。 略

貝オパールの中でメキシコ・オパールのファイアーを燃やせば賢治の「貝の火」とぴったり一致します。

板谷は「メキシコ・オパールのファイアー」を、「透明な中を紅、線、黄、青といった光の炎がゆらゆらとオーロラのようにゆらめく」と説明している。確かにメキシコ・オパールの中には、板谷の説明するようなオパールも存在する（写真2・b参照）。ただし、それは、後に紹介するがファイアオパール系でなく、ウオーターオパール系でなければふさわしくない。

また、貝オパールについてであるが、一口に貝オパールといってもさまざまあり（写真3・4・5）、板

谷がどのような貝オパールを前提に考えていたかにより異なるが、貝オパールとの関連の着想自体は、当時としてはかなり斬新なものであった。しかし、貝オパールは二枚貝であれ巻貝であれ、それ自身の形をしており、そのまま球体の、貝の火のイメージに結びつくわけでないのがモデルとして難点である。

さて、監修・福本修『ジュエリー用語事典』（日本ジュエリー協会・技術部会、平17・12）では、宝石としてのオパールの基本的な分類を、「ブラック・オパール」「ホワイト・オパール」「ファイア・オパール」「ウォーター・オパール」の四種としているが、オパールの個別的な呼び名はオーストラリア産がメキシコ産かによっても差異があり、分類も便宜的にならざるをえないのが現実のようだ。そのためか、一般に流通している「ライト・オパール」「ミルク・オパール」「クリスタル・オパール」「ボルダー・オパール」などの呼び名も同時に立項されており、混乱した感じを受ける。

産地・形状はともかくとして、『ジュエリー用語事典』の分類にしたがえば、貝の火のイメージがも

つとも近いと思われるのは、地が無色・透明で遊色を示すウォーターオパールである（写真2参照）。ただし、ウォーターオパールのうち、より強い遊色を示すものをクリスタルオパールと名づける場合があり（写真6）、そのような分類の場合にはクリスタルオパールの方がふさわしいという見方もできる。

結局のところ、貝の火のモデル探しには一定の限界があることを承知しておかなければならないだろう。次に引用する、貝の火が最も美しく輝くときの描写など、賢治の想像力のみが成せる技だということが理解される。

それはまるで赤や緑や青や様々の火が烈しく戦争をして、地雷火をかけたたり、のろしを上げたり、又いわずすが閃いたり、光の血が流れたり、そうかと思うと水色の焰が玉の全体をバツと占領して、今度はひなげしの花や、黄色のチエウリツプ、薔薇やほたるかずらなどが、一面風にゆらいだりしているように見えるのです。

そこで、モデル論の検証をここではひとまず置き、大きな意味での 貝の火 とオパールとの関連を探っておきたい。

賢治が鉱物に詳しく、また詩や童話に鉱物を多く登場させていることは、よく知られていることである。オパールに關しても和名の蛋白石の語をふくめ、その用例は少なくない。賢治がどのようなオパール（蛋白石）を實際に目にしていたか。岩石・鉱物の教材用標本として目にしていたことは確かなことだが、宝石としてのオパール（蛋白石）となると、確実なことは何も分かつていない。そこで、前章で一部引用、紹介した大正五年四月刊行の鈴木敏編『宝石誌』（思文閣）を参考に、当時オパールがどのように紹介されていたかを確認し、賢治のオパール理解を知る一助としたい。理学博士・鈴木敏は、前書きで、「未だ邦文にて宝石を誌せし著書なきを遺憾とし」著したと述べており、当時の宝石に関する学問的著述として、総合的、本格的なものとなっている。賢治が目にしていた可能性も高いと思われる。

鈴木敏は、オパール（蛋白石）を（１）（６）に

分類し、特に（１）の「貴蛋白石 Precious Opal」に關しては、さらにイ）ホに下位分類し、詳しく説明している。

（１）貴蛋白石 Precious Opal. 色美にして変彩著しく其光彩を放てる模様 に依て之を細別するこの次の如し。

イ、斑蛋白石 Harlequin Opal. 種々の小角片をなす光彩を放つもの

ロ、針頭蛋白石 Pin Point Opal 針頭の如き点々たる光彩を放つもの

ハ、火焰蛋白石 Flame Opal. 光線状の光彩を放つもの

ニ、黄金蛋白石 Gold Opal. 石面に広く黄光を放つもの

ホ、黒蛋白石 Black Opal. 緞黒の地に火焰の光を放つもの

古来有名なる貴蛋白石の産地は匈牙利の北方エペリースのチャルウエニツ坑 Czerwenitz

とす。母岩は安山岩にして、貴蛋白石は其裂罅を充たして他の種類と共産す。

略

匈牙利産の外、近来著名なるは濠洲ニウー、サウス、ウエルス産にして其主要の産地をホワイトクリッフス White Cliffs とす。一八八九年一獵師が手負のカンガルを追跡せし際、此地に美石を拾ひしが其発見の濫觴にして母岩は白亜紀の砂岩にして内に脉状をなして現出し、又砂岩内に胚胎せる介類、魚骨等の化石は数々貴蛋白石化せらるゝ事あり、黒蛋白石の石底より火焰の如き光彩を放てるものはライトニング、リッチ Lightning Ridge に産出す、クインスランドも亦ニユー、サウス、ウエルスに劣らざる貴蛋白石を同様の母岩中に現出す、年々濠洲より産出する額は百萬円内外ありと云ふ、我国に輸入せらるゝものは濠洲産多し。

(2) 火蛋白石 Fire Opal 少量の酸化鉄を含み、赤色を帯びて火焰の如き光を放つものは墨国ヒ

ダルゴー Hidalgo クエレタロー Queretaro ホンチウラス Honduras 等にありて粗面岩中に数種の貴蛋白石と混じて現出す、其他英國の北に位するフェロー Faroe 島中に産出す。

(3) 回陽蛋白石 Girasol. 主に淡青色を帯び、薄き火焰の如き光を発し、石体を動揺せしむれば時に波状の青光を放てり、フェロー島又は蘇国ウサン Usat に産す、加賀江沼郡菩提の石英粗面岩中ほ脉状をなす淡青色透明乃至半透明の中には這種に類するものもあるも其産出稀なりとす。

(4) 普通蛋白石 Common Opal. に数種あり、即ち乳蛋白石 Milk Opal は白色、青色又は緑色を帯び、不透明のもの多し、脂蛋白石 Resin Opal は脂光を放ち黄色を帯び、半蛋白石 Semi-opal 半透明、水蛋白石 Hydropbane は白色乃至淡色半透明にして舌頭に吸ひ付き、水中にて視るときは透明となる、以上数種の蛋白石は貴蛋白石を産出する所には大概之ありて我国に於ても前記岩代宝川には乳蛋白石多産し、其瑠璃色を帯び、

稍不透明にして玲瓏たる加賀菩提産は我宝石商之を裝飾品に彫琢して販売せり。

(5) 木化蛋白石 Wood Opal. 樹木の有機物は珪酸液の滲入に依り蛋白石化せられ、之を切り琢磨せば木目を現し、裝飾に用ひ美觀を呈するものあり、タスマニアのホバート Hobart 匈牙利のクレムニッツ Kremnitz 北米のコロラド Colorado 等は著名の産地にして、我国又其産地に乏しからず、岩代安達郡二本松、磐城石川郡石川山、豊前田川郡津濃等にあり。

(6) 玉滴石 Hyaline 無色透明にして粒状乃至葡萄状をなし、硝子光あり、匈牙利のクレムニッツ又ボヘミア等に産し、越中立山新湯所産にして『山姥の握り飯』の俗名ある無色、透明円粒状の蛋白石は這種に屬し、又之を珪石 Siliceous Oolite と称ふ人あり。

「貴蛋白石 Precious Opal」には、「斑蛋白 Harlequin Opal」「針頭蛋白石 Pin Point Opal」「火焰蛋白石 Flame Opal」「黄金蛋白石 Gold Opal」「黒蛋白石 Black Opal」

の五種があるとされる。近年最も価値が高いとされる「黒蛋白石 Black Opal」がすでに紹介されている点、驚かされる。さらに興味深いのは全体の解説部分で、「母岩は白亜紀の砂岩にして内に脉状をなして現出し、又砂岩内に胚胎せる介類、魚骨等の化石は数々貴蛋白石化せらるゝ事あり」の一文である。貝オパールが中生代の白亜紀砂岩中に生成されることが記述されている。

童話「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」に描かれる「ばけもの世界長」が「中世代の瑪瑙木」（拙稿「宮澤賢治文学における地学的想像力（二）」基礎篇・珪化木（一）」「言語と文化」第20号、文教大学言語文化研究所、平19・3参照）であつたことから推定されるが、中生代とは賢治にとって特別の意味を持つていると考えられる。

ユリア ペムベル わたくしの遠いともだちよ
わたくしはずいぶんしばらくぶりで

きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た
どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを

白亜系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

（『小岩井農場 パート九』）

おそらくこれから二千年もたつたころは
それ相当のちがつた地質学が流用され
相当した証拠もまた次次過去から現出し

略

あるいは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

発見するかもしれません

（『春と修羅』第一集 序）

「小岩井農場 パート九」や『春と修羅』第一集「序」
で賢治の求めているのは、白亜紀砂岩に遺された化石
としての「巨きなまつ白なすあし」の跡である。ただ、
《あんまりひどい幻想だ》と賢治自ら記しているように、
現実には、白亜紀砂岩から「きみたちの昔の足あと」
を発見できないことは賢治自身承知しているのである。
それゆえ「おそらくこれから二千年もたつたころ
は／それ相当のちがつた地質学が流用され／相当し

た証拠もまた次次過去から現出し」とも記しているの
である。

ここに、貝オパールの意味が、重みをもって再浮上
してくる。賢治にとって貝オパールは、単に「白亜紀
砂岩」から出る化石の一つとしてではなく、「貝殻の
やうに白くひか」る「底の平らな巨きなすあし」の代
替物として機能しているのである。

板谷が正しく述べているように、貝オパールは貝そ
のものがオパールに変化したわけではなく、地層中で
貝が溶け、その残された空隙にオパールの成分が長い
年月をかけ充填されたものである。これは、木のオパ
ールでも恐竜の骨のオパールでも同様である。ただ、
仏教の視点に立てば、貝は計り知れない年月を経てオ
パールに転生したという考えが成り立つのである。

【智度論十】に「千歳が過ぎ氷化して頗梨珠となる」
と記されていたことも示唆的である。氷が千年（はか
り知れない年月）を経て頗梨珠（宝石）に変化したと
いうのである。

私は、仮説ではあるが、貝の火の成り立ちは単
一なものではなく、貝オパールに関する知識と如意珠に

関する知識とが複合されてきたものではないかと考えている。賢治にとって、地学的出来事であることが、同時に仏教的出来事であったことを強調しておきたい。

四 「鳥捕り」とジャータカ

「銀河鉄道の夜」に「鳥捕り」という殺生を生業とする人物が登場する。銀河の岸辺で、渡ってくる鷺や雁を捕まえる仕事をしているのである。この「鳥捕り」に関し、歌稿「A」「B」の短歌、217との関わりが知られている。

歌稿「A」鳥さしはをとりをそなへ北上ぎしの明るき草にひとりすはれり

歌稿「B」そのをきな／をとりをそなへ／草明き／北上ぎしにひとりすはれり

この歌稿 217の歌は、「大正三年四月」からの項に収められており、したがって「大正三年四月」から

「大正四年四月」の間に書かれたか、着想されたものといえる。季節はおそらく秋だろう。

「銀河鉄道の夜」の「鳥捕り」は鷺や雁、鶴といった比較的大型の鳥を捕らえるが、本来の「鳥刺し」は小鳥類を捕るのが目的である。「鳥捕り」と「鳥刺し」はほぼ同じ職業を指す語と考えてよい。工藤哲夫は「『鳥捕り』考」（『賢治論考』（和泉書院、平7・3））で「鳥捕り」の語彙が一般的でないことに注目し、多くの先行資料・文献にあたり、「『鳥捕り』が世間一般で普通に使用される既成品としての用語でないのではないか」との判断を示している。つまり、「鳥捕り」という語自体は日本語として存在しているが、同時代的な用例がなく、賢治独特の用法になっている可能性が高いとの判断である。

短歌に描写される「鳥さし」がどのような「をとり」を準備していたか定かではなく、また、「鳥もち竿」を使っていたのか、それとも「網」を仕掛けていたのかも定かではないが、どちらにしても、「銀河鉄道の夜」の「鳥捕り」の鳥を捕る方法である「掴み取り」というのは、現実の「鳥さし」と比較してきわめて特異と

いえるだろう。

さて、鳥捕りの語に關し、昭和になつてからの用例であるが、『捕鳥者と鶉』という話に用いられていることが分かつた。この話は『修養全集第四卷 寓話道話 お伽噺』非売品、発行所 大日本雄弁会講談社 昭4・2に収められている。『修養全集』は全一二卷。第四卷(総八百頁)の内容の概略にふれておくと、『寓話篇』九四話、『道話篇』五四話、『お伽噺篇』十八話である。『お伽噺篇』には、小川未明、菊池寛、浜田広介、千葉省三らの作品が収められている。『捕鳥者と鶉』は、『寓話篇』に蘆谷蘆村の著者名で収められているが、ジャータカからの翻訳である。鳥捕りと『捕鳥者』を比べた場合、読みが完全に一致しており、漢字も前者が和文的で後者が漢文的という違いはあるが、ほぼ同じとみてよいのではないかと。ただ、『捕鳥者』がパリー語のジャータカからの翻訳とすれば、昭和四年刊行の『修養全集第四卷 寓話道話 お伽噺』から賢治が鳥捕りの語を考案した可能性はない。私が調べた範囲では、『捕鳥者と鶉』に対応するジャータカは、パリー語のジャータカ第三三

話「和合前生物語」である。翻訳では、ジャータカを示す要素としての、鶉の指導者がボーディサッタ(釈尊)であつたこと、捕鳥者がデーヴァダッタ(提婆達多)であつたこと、がカットされている点を指摘しておく。

元話が同じであると推定されるジャータカが、漢訳仏典にも存在する。『大正新修大藏經』(大正一切経刊行会、大正昭9)第四卷に、『捕鳥師』の用例が二つ見出される。一つは『雜譬喻經 比丘道略集』に鳩摩羅什訳として収められているもので、

(二六) 昔有捕鳥師張羅網於澤上。以鳥所食物著其中。衆鳥命侶競來食之。鳥師引其網。衆鳥盡墮網中。時有一鳥大而多力。身舉此網與衆鳥俱飛而去。鳥師視影隨而逐之。有人謂鳥師曰。鳥飛虛空而汝步逐。何其愚哉。鳥師答曰。不如是告。彼鳥日暮要求宿。進趣不同如是當墮。其人故逐不止。日以轉暮。仰觀衆鳥競飛爭競。或欲趣東或欲趣西。或望長林或欲赴淵。如是不已須臾便墮。鳥師遂得次而殺之。捕鳥師者如波旬也。張羅網者如結使也。

負網而飛如人未離結使欲求出要也。日暮而止如人懈怠心生不復進也。求栖不同者如起六十二見恒相反也。鳥墮地者如人受邪報落地獄也。此明結使塵垢是魔羅網也。

もう一つは、「衆經撰雜譬喻 卷下」にやはり鳩摩羅什訳として収められているものである。内容としてはほぼ同じなので、引用は省略する。

意識ではあるが「雜譬喻經 比丘道略集」の本文を拙訳で以下に示す。

昔、捕鳥師がいて、川原で網を張っていた。鳥が食べる餌をその中に置いて待っていたら、多くの鳥が仲間をつれ競ってやってきて餌を食べた。鳥師が網を引くと、鳥は皆網に捕らえられてしまった。鳥の中に大きくて力持ちの一匹の鳥がいた。みずからその網を挙げると、他の鳥とともに飛び去って行った。鳥師はその姿を見て、あとを追いかけていった。ある人が鳥師に言うことには、鳥は大空を飛んでいくのに、お前さんはそれを歩い

て追いかけている。なんと愚かなことが。鳥師が答えるには、それを言うには及ばない。あの鳥たちは日暮れになれば寝るところを求めるだろう。飛ぶ方向がそれぞれ違えば、きつと落ちてくるだろう。それで鳥師は追うことを止めなかった。日は次第に暮れて夕方になった。鳥たちを見てみると争い競っている。ある鳥は東に行こうとし、ある鳥は西に行こうとしている。ある鳥は大きな林を求め、ある鳥は川に行こうとしている。このように言い争いがたえないため、鳥たちはあつという間に地に落ちてしまった。鳥師はそれで次々と鳥を捕えると殺してしまった。

捕鳥師は悪魔のようなものである。網を張るのは煩惱のようなものであり、網を背負って飛ぶことは、いまだ煩惱を脱していない人が、救いを求めてもがいているようなものである。日が暮れて止まるのは、人が怠け心を生じ二度と前に進まないようなものだ。ばらばらに住処を求めることは外道の者たちがつねに反目し合っていることと同じで、鳥が地に落ちるのは、邪報を受け人が地

獄に落ちることと同じである。これらによって、
煩惱が悪魔の網であることは明らかである。

『大正新修大蔵經』を賢治が目にした可能性について考察しておきたい。鳥捕りがテキスト上で確認できるのは、「銀河鉄道の夜」の初期形第二次稿段階からである。しかし、初期形第一次稿に「捕り鳥」が登場しなかったと結論付けることはできない。破棄された部分の初期形第一次稿に登場していた可能性が残されているからである。その可能性を考慮するなら、初期形第一次稿の成立が大正十三年の秋から冬頃とされており、「鳥捕り」登場の上限がさかのぼることになる。大正十三年から刊行が始まった『大正新修大蔵經』が、「鳥捕り」の発想に直接関わった可能性は低いと判断しておかなければならないだろう。また、『国訳大蔵經』（国民文庫刊行会、大8・6）にも収められていない。ただし、明治期の活字刊行本で、明治一八年刊『大日本校訂大蔵經縮刷藏本』と、明治三十六年刊『卍字藏』（京都藏經書院）に、「雜譬喻經 比丘道略集」、「衆經撰雜譬喻 卷下」がそれぞれ収められて

おり、賢治がそれらを見ていた可能性が残されている。もし賢治が、『雜譬喻經 比丘道略集』か『衆經撰雜譬喻 卷下』のどちらかを見ていたと仮定したなら、どのようなことが分かるかというところ、一つ目は、漢訳版ゆえに「鳥捕り」の語源となったとの推定が可能となること。二つ目は、漢訳版は「鳥」とだけ記されており、「鳥名が具体的でないことにより、「銀河鉄道の夜」で「鷺」や「雁」「鶴」と多様に発展する余地が残されていること。三つ目は、漢訳版は舞台が「川原」であること。先に引用した、「鳥さし」の現れる歌詞（A）（B）の短歌（217）は、北上川の岸辺が舞台であり、共通性が指摘できる。また、「銀河鉄道の夜」での「鳥捕り」も鳥を捕る場所は銀河の「河原」である。

ここで、「銀河鉄道の夜」での「鳥捕り」の登場場面を確認しておく。「（八）鳥を捕る人」と一章が当てられており、「鳥捕り」が物語構造上いかに重要な役割であるかを窺わせる。にもかかわらず、「鳥捕り」に関し、これまでの研究で本質的な説明はなされていない。

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の声
が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、
白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛け
た、赤髭のせなかのかがんだ人でした。

鳥捕り はこのように銀河鉄道に乗り込んでくるが、
ジョバンニやカムパネルラ、さらに、その後に乗り合
わせる「タダシ」や「かほる」、家庭教師の「青年」
らが、初めての 銀河鉄道 への乗車であるのに対し、
鳥捕り は繰り返し 銀河鉄道 を利用しているら
しく、いわば、銀河鉄道沿線に暮らす人々なのである。
銀河鉄道沿線に暮らす人々 という捉え方は、矢野
弥生の「銀河鉄道沿線に暮らす人々 ダンテ『新曲』
「煉獄篇」を中心に」「（高知大学宮沢賢治研究会編
『知の冒険宮沢賢治』所収、平17・2）で提示された
概念だが、矢野の指摘するように、鳥捕り は銀河
鉄道の或る区間しか乗車することができず、そのこと

は、鳥捕り は決して己の天国のあるところまで乗
車することができないことを意味している。その理由
が鳥捕り の生業と関係しているだろうことは容易
に想像がつく。鳥捕り は不殺生戒という戒を破っ
ているのである。「雑譬喻經 比丘道略集」の「捕鳥師」
が「波旬」のようだと記されているのはそのためであ
る。「波旬」とは悪魔の名で、殺者・悪者 の意であ
る。

ではなぜ、「銀河鉄道の夜」では、その 鳥捕り が、
天の世界に住んでいるのか。鳥捕り は、とても気
のよい老人として描かれている点に注目しておきた
い。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥
をつかまへる商売だね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

鳥をどうやって捕るのかというジョバンニの質
問に対し、鳥捕り は、次のように答えている。

「そいつはな、雑作ない。さぎといふものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待つてゐて、鷺がみんな、脚をかういふ風にしてお下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、びたつと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んぢまひます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたへるぢやありませんか。」

「をかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「をかしいも不審ありませんや。そら。」その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい、いまとつて来たばかりです。」

「ほんたうに鷺だねえ。」二人は思はず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のやうに光る鷺のからだ、十ばかり、少しひらべったくなつて、黒い脚をちぢめて、浮彫のやうにならんでゐたのです。

「銀河鉄道の夜」の 鳥捕り の犯す不殺生戒は単純ではない。「鷺は、かたまつて安心して死んぢまひます」とあるからである。基本的には殺生をしていることになるのだから、鳥の捕り方も独特で、網を使うわけでも、鳥モチを使うわけでもない。「川原で待つてゐて、鷺がみんな、脚をかういふ風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、びたつと押へちまふんです。」いわば、掴み取りである。この掴み取りという方法が、鷺たちが「安心して」死んで行けるために必要なのである。もう一つ大切なことは、死んだ鷺は肉としてではなく、チョコレートのようなお菓子として食される点である。

それゆえ、われわれは、このような 鳥捕り の行為を殺生と呼ぶことに、躊躇するところがあるのであ

る。

鳥捕りが捕まえた鷺をなぜ「押し葉」にするのか、理解しにくい行為ではあるが、私は、鷺を食肉ではなくお菓子にするための賢治流の工夫と考えている。その論理を説明するためには、次の箇所を引用しておくなければならない。

「鷺はおいしいんですか。」

「えー、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じるとまだらになって、なにかのあかりのやうにひかる雁が、ちやうどさっきの鷺のやうに、くちばしを揃へて、少し扁べつたくなつて、ならんでゐました。

「こつちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできてゐるやうに、すつときれいにはな

れました。

「どうです。すこしたべてくらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎつてわたしました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ。）とおもひながら、やつぱりぼくぼくそれをたべてゐました

死んだ鷺を「押し葉」にするということは、三次元を二次元化することである。鷺の存在を一次元下げる作業である。これは、鷺の身体性を消す作業ともいえるが、おそらく、基本的に「四次元」世界である銀河鉄道世界の法則が、肉をお菓子に変えているのであり、その結果、鳥捕りは殺生をまぬがれ、いわば、お菓子職人に職業替えを果たしているのである。初期形第三次稿の「銀河ステーション」の章では、ブルカ二口

博士からのテレパシーと考えられる場面が記されており、次のように銀河鉄道世界の法則（規則）を伝えている。

（いくらなんでも、あんまりひどい。ひかりがあのなチョコレートでも組みあげたやうな三角標になるなんて。）

ジョバンニは、思はず誰へともなしにさう叫びました。

するとちやうど、それに返事をするやうに、どこか遠くの遠くのもやの中から、セロのやうなこつこつした声がきこえて来ました。

（ひかりといふものは、ひとつのエネルギーだよ。お菓子や三角標も、みんないろいろに組みあげられたエネルギーが、またいろいろに組みあげられてきてゐる。だから規則さへさうならば、ひかりがお菓子になることもあるのだ。たゞおまへはいままでそんな規則のどこに居なかったただけだ。ここらはまるで約束がちがふからな。）

銀河鉄道の世界は、地上よりも清められた世界である。鳥捕りがお菓子職人と替わるりうるように、インデアン もまた、不殺生戒を犯す存在から、微妙にずれた位置を与えられている点、注目しておく必要がある。

略 新世界交響楽はいよいよはつきり地平

線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番へて一目散に汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんさい。」

黒服の青年も眼をさしました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追ひかけてゐるんでせう。」

「いゝえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。獅をやるか踊るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたといふ風にポケットに手を

入れて立ちながら云ひました。

まったくインデアンは半分は踊つてゐるやうでした。第一かけるにしても足のふみやうがもつと経済もとれ本気にもなれさうでした。にはかくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるやうになりインデアンはぴたつと立ちどまつてすばやく弓を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしさうに立つてわらひました。そしてその鶴をもつてこつちを見てゐる影ももうどこん小さく遠くなり電しんばしらの碍子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたたつもろこしの林になつてしまひました。

インデアンが空に向かつて弓を引き、「そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来て」と描かれている以上インデアンもまた 鳥捕り と同様殺生を犯しているには違ひないのだが、その様子が「猟をするか踊るかして」「いるよつであることにより、殺生の罪が薄らい

でいると印象づけられるのである。賢治が『農民芸術概論綱要』で、第四次元としての農民芸術の理想の一つに「動作は舞踊」と記していることを指摘しておきたい。

よだか（「よだかの星」）は最終的に殺生を拒絶したことにより天上界で星となつたのだが、北上川の岸辺の鳥刺しのように、生業などの事情で殺生を避けて通れない場合も多い。賢治は、そのような人たちに對しても、天の世界に住む場所を与えたかつたのだと思う。童話「なめとこ山の熊」の小十郎を、熊撃ちとして生かさせ、最期熊により命を落とさせたのも、殺生を生業とする人たちに對する賢治ぎりぎりの同情だつたと考えられる。

鳥捕り が鷲の猟を終えたとき、「急に両手をあげて、兵隊が鉄砲玉にあたつて、死ぬときのやうな形をし」たことにも深い意味がある。小十郎の最後と同じで、他者の命を奪つたものは、その報いとしていつかは命を投げ出さねばならないのである。清められた場所（第四次元）としての銀河鉄道世界に住む 鳥捕りは、殺生のたびに、殺される儀式を繰り返さなければ

ならないのだろう。

五 銀河鉄道沿線の地学

「(八) 鳥を捕る人」の章の直前が「(七) 北十字とプリオシン海岸」の章である。賢治はそこで、大学士が銀河の河原で化石を掘るといふ奇妙な場面を描いている。

少し長くなるが、ジョバンニとカムパネルラが汽車を降り、銀河の河原に出、化石掘りを見学する場面を引用する。

川上の方を見ると、すすきのいつばいに生えてある崖の下に、白い岩が、まるで運動場のやうに平らに川に沿って出てゐるのです。そこに小さな五六人の人ががが、何か掘り出すか埋めるかしてゐるらしく、立つたり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りました。その白い岩になった処

の入口に、

「プリオシン海岸」といふ、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向ふの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植ゑられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議さうに立ちどまつて、岩から黒い細長いさきの尖つたくるみの実のやうなものをひろひました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来らんぢやない。岩の中に入つてゐるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあそこへ行つて見よう。きつと何か掘つてから。」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近づいて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のやうに燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさへたやうなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせはしさうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかったりしてゐる、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしてゐました。

「そのその突起を壊さないやうに。スコップを使ひたまへ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたといふ風になつて、半分以上掘り出されてゐました。そして氣をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あつたらう。それはまあ、ざつと

百二十万年ぐらゐ前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れであるところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしてゐただ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこつるはしはよしたまへ。ていねいに鑿でやつてくれたまへ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やらんとした空かに見えるやしないかといふことなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈ぢやないか。」大学士はあわてて走つて行きました。

この場面の成立には、「一九三三、八、七」の日付をもつ随想風の作品「イギリス海岸」が深く関わっている。「イギリス海岸」は、北上川河岸に露出している凝灰岩質泥岩（新第三紀鮮新世）中の「くるみ」（写真7）や「偶蹄類足跡」の化石発掘の様子を描いており、「ボス」の骨の発掘を除き、ほぼそのまま「銀河鉄道の夜」に用いられている。「プリオシン海岸」のプリオシンとは、鮮新世の英語名 Pliocene から来ており、賢治は、北上川岸の凝灰岩質泥岩を、イギリス海岸やプリオシン海岸と名づけたのである。

ここで問題となるのが、北上川岸の地層が、なぜ銀河の岸辺の地層として転用しうるのか、ということである。この問題を考えるには、賢治にとっての銀河世界の意味が二通りあることを理解しておかなければならない。一つ目は、死後の世界としての銀河世界であり、もう一つは、多元世界の一つとしての銀河世界である。死後の世界としてというのは、キリスト教の天国のような世界観である。仏教でいうなら、転生先ということで、天界を指す。多元世界の一つというのは、おそらく賢治独特のもので、身体感覚から導き

出されたものである。詩「五輪峠」に見られる世界観がそれである。

あゝこゝは

五輪の塔があるために

五輪峠といふんだな

ぼくはまた

峠がみんなで五つつあって

地輪峠水輪峠空輪峠といふのだらうと

たったいままで思つてゐた

地図ももたずに来たからな

そのまちがった五つの峯が

どこかの遠い雪ぞらに

さめざめ青くひかつてゐる

消えようとしてまたひかる

このわけ方はいゝんだな

物質全部を電子に帰し

電子を真空異相といへば

いまとすこしもかはらない

宇部五右衛門が目をつむる

宇部五右衛門の意識はない
宇部五右衛門の霊もない
けれどももしも真空の

こっちの側かどこかの側で
いままで宇部五右衛門が
さういふやうな現象が
ぽかっと万一起るとする

そこにはやっぱり類似のやつが
これがおれだとおもってゐる

それがたくさんあるとする
互ひにおれはおれだといふ
互ひにあれば雲だといふ
互ひにこれは土だといふ
さういふことはなくはない
そこには別の五輪の塔だ

五輪峠という地名に関し、峠が五つあるわけではなく、峠は一つで「五輪の塔」があるからそう呼ばれることを理解したうえで、賢治は、峠がさらに四つあってよいという世界観を展開していく。つまり、今の世界と

同じような世界がさらに四つあっても科学的に矛盾することはないと考えようとしているのである。「そこには別の五輪の塔だ」という詩句は、そこには別のイギリス海岸だ」という読み替えを許容するはずである。「けれどももしも真空の／こっちの側かどこかの側で」という科学的仮説が、銀河世界を誕生させているのである。しかし、もともとはおそらく、大正六年八月・保阪嘉内宛葉書に記された「アライ山ノナミ（ユケドモユケドモ）雲ハシハラツクリ山ヲツクリ、人ハマナコヲトヂテアラハレル木立水ヲ『マコトノ世界トヒトシカラズヤ』トカナシンデ行キマス。世界ノＡモ、世界ノＡモ均シク寂カナ秋ニナリマシタ」の「マナコトヂテアラハレル」世界と同質のものである。このような眼を閉じて（または眼を開けたままで）も現れることがある（現れる世界を描いたのが、「ガドルフの百合」である）。

そしてガドルフは自分の熱くて痛む頭の奥の、青黴い斜面の上に、すこしも動かさずかゝやいて立つ、もう一むれの貝細工の百合を、もっとはつき

り見て居りました。たしかにガドルフはこの二むれの百合を、一緒に息をこらして見つめて居ました。

ガドルフは「二むれの百合」を、一緒に見つめていたのである。確認のため述べておくが、この「二むれの百合」を本質的に区別することはできない。世界が二つあると賢治は解釈しているからである。心理学的に、または精神病理学的に言えば、何らかの説明は可能であるかもしれないが、そのような分析は別稿で扱いたいと考える。

「銀河鉄道の夜」での大学士が、銀河の岸の地層から化石を発掘する理由として、「証明するに要るんだ」と答えていることから分かるように、化石の発掘という作業は、銀河世界の实在性の証明を意味している。ただし、この場合の实在性とは、三次元的实在性ではない。あくまで多元世界を前提とした实在性の証明である。それゆえ、「ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつ

からみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えるやしないかといふことなのだ」という大学士の言葉が添えられるのである。

大学士が説明していることは、詩「北いっばいの星ぞらに」で次のように記されたことにも通じている。

頭のまはりを円くそり

鼠色した粗布を着た

坊主らのいふ神だの天が

いつたいどこにあるかと云つて

うかつに皮肉な天文学者が

望遠鏡をぐるぐるさせるその天だ

するとこんどは信仰のある科学者が

どこかの星の上あたりに

その天を見附けようとして

やつぱり眼鏡をぐるぐるまはす

さういふ風な明るい空だ

しかも三十三天は

やっぱりそこにたしかにあつて
木もあれば風も吹いてゐる

われわれにとつて「がらんとした空」であつても、賢治にとつては「しかも三十三天は／やっぱりそこにたしかにあつて／木もあれば風も吹いてゐる」のである。銀河鉄道は、そのような世界を走っているのである。銀河の岸で大学士の発掘した化石という科学的証拠は、ジョバンニだけでは真実のこととして受け止められただけである。

このような宗教的真実が三次元世界の科学（地学）で証明されるために、われわれは「これから三千年」（『春と修羅』第一集 序）待たなければならぬ、と賢治はいいたいのである。

（了）



写真1-a 遊色を示さないメキシコ産ファイアオパール



写真1-b 遊色を示すメキシコ産ファイアオパール



写真2-a 遊色を示さないメキシコ産ウォーターオパール

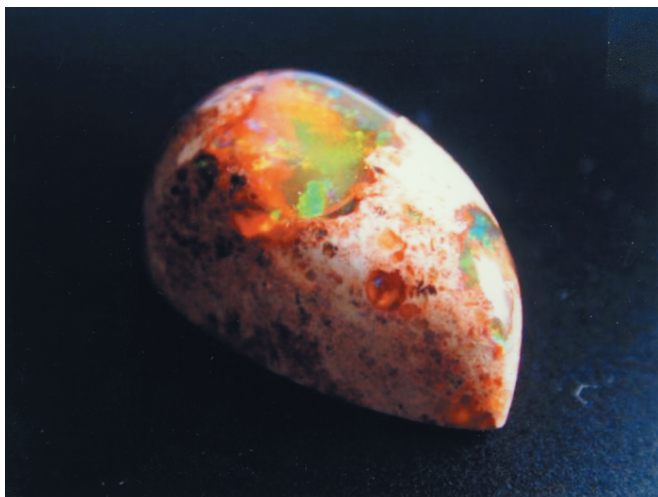


写真2-b 遊色を示すメキシコ産ウォーターオパール



写真3 貝オパール



写真4 貝オパール



写真5 貝オパール



写真6 クリスタルオパール



写真7 イギリス海岸で採取されたクルミの化石